きまぐれハニィ

如月春花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
きまぐれハニィ

【Ｎコード】
Ｎ４１７４Ｄ

【作者名】
如月春花

【あらすじ】
俺の彼女は気まぐれ。そんな様子はまるで猫のようで。そしてそんな君はどうやら今日は甘えんぼの日。＊＊ほのぼの恋愛短編小説です

俺の彼女は気まぐれ。
そんな様子はまるで猫のようで。

そしてそんな君はどうやら今日は甘えんぼの日。

「ね、ね、尚吾っ。」

そう言いながらベッドの上でごろごろしている俺に乗っかってくる凛。
お腹に乗られてもあまり重くないあたりがちょっと心配。
ちゃんとご飯食べてるのかなぁ、なんて。
そんな事を考えていると凛が前かがみになって俺の頬にそっとキスをした。

「何？」
「なんでもないっ。」

言いながらへへっ、と笑っている凛。
凛が意味もなく俺を呼ぶときは機嫌のいいとき。
俺にかまって欲しいとき。

今日は本当は二人で買い物の予定だった。
けれど昨日から降り続いている雨。
それがあまりにもひどくて俺も凛も出かける気を失ってしまった。
と、言うわけで急遽俺の家でまったりと過ごす事にしたのだった。

「凛、今日は機嫌良いのな。」
「尚吾と一緒だからねー。」
嬉しい事を言ってくれるとことん甘えモードの凛。
俺はお腹の上に乗っかっている凛を少しずらして、上半身だけを起こす。
そして未だ嬉しそうに微笑んでいる凛をそっと抱きしめた。
「俺も。凛と一緒で嬉しいよ。」
「…当たり前じゃない。」
いつもより少し小さな声でそんな自信過剰な言葉を吐く。
けれど知ってるんだ。
それが凛の照れ隠しだってこと。
そんな凛が可愛くて、俺は凛の頭をそっと撫でた。
すると凛は俺にぎゅっ、と抱きついてくる。
「ねー、尚吾。」
「ん、何？」
凛は抱きついている俺の腕をそっと放すと俺と視線を合わせた。
俺は凛をじっと見つめる。
「尚吾は、私の事好き？」
にっこりと微笑みながら問う凛。
どうやら俺の答えは分かってて聞いているらしい。
「凛は、俺の事好き？」

そんな凛に悪戯をしてやろうと凛と同じようににっこり笑って、凛と同じ質問をする。
すると目の前の凛の頬がむぅ、と膨らんだ。

「私が聞いてるのに。」
「答えなんて分かってるクセに。」

悪戯っぽく笑いながら凛の言葉に間髪入れずに答えると凛の頬が一層膨れる。

「何だよ。」
「尚吾なんて嫌いだもん。」

少し悪戯が過ぎたらしい。
凛はすねてぷいっ、とそっぽを向いてしまった。
けれど俺の上に未だ乗っかっているところを見るにそれほど怒ってはいなさそう。

「凛？凛ちゃん？ごめんね？」

言いながら横を向いてしまっている凛の顔を挟みくいっ、と自分のほうへと向けた。

「尚吾なんて嫌いだもん。」

さっきと同じ言葉を繰り返して膨れたままの凛。
俺はそんな凛も可愛くて頭を撫でた。

「……ねぇ、尚吾。尚吾は私の事好き？」

「好きだよ。大好き、愛してる。」
そう言うと目の前には凛の嬉しそうに微笑む顔。
さっきの膨れた顔も可愛いけれど、やっぱり笑った顔が一番可愛い。

「凛は俺の事好き？」
「うん、尚吾大好き！」

言うなりぎゅーっと抱きついてきた凛。
それに答えるように俺も凛をきつく抱きしめた。
そして凛の髪にたくさんのキスを降らす。
すると凛によって再び腕をほどかれまた視線を合わす。

「ね、尚吾。」
「ん、何？」

「…ずっと一緒？」

いつも自信過剰なくらい自信家のクセに。
ちょっと不安そうな目で俺を見つめ小首を傾げた凛。
そんな凛に俺は優しく微笑みかける。

「当たり前だろ。ずーっと一緒。」

そして微笑みとともに優しく答えてやった。
俺の言葉に嬉しそうに笑みをこぼした凛。
俺は凛の頭に手を伸ばして、さっき俺に抱きついたからであろう少し乱れた髪を整えてやる。
最後に顔にかかった髪を手で直すとくすぐったかったのか凛が少し身をよじった。

「約束、ね？絶対一緒だよ？」
「ん、約束。」
そう言うと俺は凛の頬に手を寄せて優しくキスをした。
再び視線を合わせたときには凛の嬉しそうな顔。
何か言いた気な凛を見て俺は首を傾げてみせる。

「尚吾、お腹すいた。」

あまりに唐突な言葉に思わず噴出しそうになる俺。
そんな凛も愛しくてまた頭を撫でようとする。
けれどそんな俺の手は急に立ち上がった君のおかげで行き場を失った。

「ねー、尚吾ー。なんか作ってー？」

そう言いながら冷蔵庫を覗く凛。
そんな気まぐれはまるで猫のようで。
凛が猫なら、きっとちょっと自信家で気まぐれな白猫。
ちょっと我侭だけどすごく魅力的な白猫。
そんなどうでもいい事を考えながら凛の元へと向かった。

あまり何も入っていない冷蔵庫。
凛と一緒に覗き込む。

「…チャーハンくらいしか出来ないけどいい？」
「うん！やっぱり尚吾大好きー！」

調子良くそう言うと嬉しそうに微笑んだ凛。

うん、その笑顔が見られるなら俺はいつでも君の傍に居るよ。
だから君も、飽きずに俺のそばに居て。
たまには気まぐれで喧嘩もするかもしれないけど。
何をしてても君を想っているから。
だから。“ずーっと一緒”で、お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4174d/

きまぐれハニィ

2011年1月3日19時40分発行